日本語総論Ⅱ授業連絡 第４回

５．１

本日（５／１）　各教室にて。

持ち物　筆記用具・小論文バイブル・ファイリングしたプリント（先週配布済）・テキスト

③・④時限タイムスケジュール

③	１０：５０～１１：２０	確認	※１
④	１１：３０～１２：３０	論述６０分間	
	１２：３０～１２：４０	次時の予告	※２

※１　・「前回の優先席」の答案で気づいたことを生徒へと伝える。
・今回の「おたすけプリント」を確認する。
- Ｐ．１「アプローチの仕方」を読ませて、「自分なりの脳死に対する意見を述べなければいけない」ということをしっかりと把握させる。
- Ｐ．２～４に登場する「二つの立場」への理解を確認させる。
- Ｐ７から１段落の内容についてはすでに示されていることを確認させる。
- 「脳死問題」を考えるときに「日本人の遺体観」についての自分なりの見解を示していくことを確認させる。

※２　・「おたすけ復習プリント」を配布、確認させる。
・次事の予告をする。
- 来週は中間試験！その前日には今回の答案を返却する。
- 定期試験は持ち込み不可。
- 今まで取り組んできたことを復習しておく。
- 小論文バイブルをよく読んでおく。

次週（５／８）

中間試験

日本語総論Ⅱ第２回「日本人の遺体観について」
おたすけプリント１

今回は、小論文のテーマの定番となっている「脳死」に関しての論述です。「脳死」や「臓器移植」の問題は、小論文の対象になりやすい。日頃からキミ自身が問題意識をもっているかどうかが問われます。課題文以外にも、講談社ブルー・バックス「脳死とは何か」等も読んでおくといい。特に医療・薬学系への進学を考えている人は必須です。また、文科系でこの問題が問われたら、関連する学部・学科にからめて論述すればいい。たとえば、法学部であれば法医学の立場から、文学部であれば宗教観などの面からというふうに。いずれにしても、論述に値する題材です。挑戦しよう！

◎ アプローチの仕方

設問条件の「死の定義」「死の判定」という二つの言葉を課題文からまとめる必要があります。課題文型小論文は要旨まとめが大きなポイントです。そして、自分なりの「脳死」に対する意見を、述べなければいけません。なぜなら、「脳死」の判定を抜きに日本人はおろか自分なりの遺体観など述べられないからです。「脳死」をもって死と判定することについての自分なりの考えを提示する必要があります。この問題で問われているのは日本人の遺体観ですが、あまりにも宗教的・感情的な論述は採点の対象になりにくいものです。

今回は、文章全体のかなりの部分を「脳死」について占めてもよいでしょう。その上で、自分なりに理解している日本人の遺体観を追加する形で述べればよいです。

考える材料として … 小論文バイブルの「思考の材料(P.27～)」にまとめよう！

前述したように、将来、対人援助職へと歩を進める可能性の高い学部・学科の小論文入試においては、直接間接にかかわらず、「いのち」に関わるテーマを常に内包していると言えるでしょう。ここで、「死」というものを少し考えてみましょう。

「いのち＝生」の対義語として「死」ということばがあります。生と死とは表裏一体をなすことばであり、「生」を考える上で「死」を考えることは避けて通れないことがらです。そして、「死」を定義づけることばも、「脳死」「心臓死」「脳幹死」「尊厳死」「安楽死」など、入試小論の課題文にもよく登場しています。

キミの思考を高めるためにも、合格答案を作成できるようになるためにも、ここで「死」ということがらについて、考えてみましょう。

まず、その材料として映画『おくりびと』を視聴しました。

映画には、「日本人の遺体観」がみごとに表現されています。西洋的な遺体観とは大きく異なる日本独特の遺体観に気づくはずです。そして作品を鑑賞しただけでも、そこからキ

ミの思考が育まれることは、間違いありません。

そもそも「死」とは何か？キミは考えたことがあるでしょうか？あたりまえのことですが、それは自分では経験できないもの、つまり、その体験を経験として生きて語ることができないものです。よって、「死」を語るときはあくまでも、自分以外の他者についてのものになります。つまり、「『死』とは何か？」とは「『他者の死』とは何か？」ということ。ですから、あくまでも私たちは「他者についての死」を語っているという自覚をもとにして話を進めるしかありません。

映画『おくりびと』には、そのまさに「他者の死＝他者の遺体」に対する私たちの考え方が反映されています。それは、国や民族、宗教や自然観の相違によるものなのかもしれません。

まず視聴後にキミに考えてもらいたいこと、それは「『おくりびと』に見られる日本人の遺体観とは何か？」ということです。

きっと、今まで見え（考えられ）なかったけれども、映画視聴後に見えてくる（考えられる）ことがらがあるはず…。自分なりでけっこうです。**考えたことを小論文バイブルの思考の材料(P. 27～)にメモ書きしておきましょう！**書き出しを「**日本人の遺体観は、**…」や「**『おくりびと』の心とは、**…」などに定めて、自分なりに感想や定義づけを書き留めておこう。

次にキミに意識してもらいたいこと、それは、「日本人の遺体観」を参考にして考えられる入試小論文の頻出テーマに、「脳死」「臓器移植」があるということです。また、その「**脳死」「臓器移植」はキミが思考する上で、今回の設問条件にもある「死の判定」「死の定義」と一体をなす、不可分なもの**でもあります。

まず具体的に二つの立場を想定してみましょう。

一つは**「脳死状態と判定された患者の家族」の立場(A)**で、もう一つは**「臓器移植によって患者のいのちをつなぎたい家族」の立場(B)**です。

傍観者ではなく、想像力と当事者意識をもって考えていきましょう！

何に価値があるか、その絶対的なものが存在していない私たちの社会において、唯一尊重すべき価値は「いのち」です。その**「いのち」は、「脳死」「臓器移植」の二つの切り口によって、(A)と(B)のまったく異なる立場が現実問題として、社会というステージに登場**しています。最大の価値であるいのちですが、立場によってその価値が変質することを想定してみましょう。現代社会における正しさのスタンダードは何なのか、そして、最大の価値であるいのちをどのように捉えればいいのか。考えてみましょう。

まずは**(A)・(B)**、それぞれについて、その立場を想定してみますね。

(A)脳死状態と判定された患者の家族

- 現時点である特定の医療機関において、ある医師が診断した脳死判定が絶対的に正しいという保証はどこにもない。
- たとえその判断が正しかったとしても、本人は呼吸もしており体温もあり、いつか回復して目を開ける日が来るかも知れない。
- 眠っているようにしているが、こちらの呼びかけにかすかな反応がある。
- 日本人は明らかに死んでいる人であっても、生前の姿に復元して、まるで生きているように化粧などを施してお別れをする(日本人の遺体観)。死者を弔うときですらそうであるのに、心臓の鼓動が聞こえ呼吸をしている家族を、死んでいると思えるわけがない。
- 本人のドナーカード(臓器提供)は正式な手続きではない。何より私たち親がそれを許さない。

(B)臓器移植によって患者のいのちをつなぎたい家族

- 生まれつき肝臓に疾患があり、子どもの３年生存率を医師から知らされた。なんとか命をつないでやりたい。
- 今後の治療では回復は見込めず、死を待つしかない状態にある子どもに、せめてあと５年でいいから「いのちの喜び」を感じさせてあげたい。せっかくこの世に授かった命だから、臓器移植に臨み、生きていることの素晴らしさを教えてあげたい。
- できれば親である私の命を捧げてでも、子どもの命を守りたい。たとえ手術に成功しても、もちろん何年生きられるかわからない。でも、少しでもいいからこの世に存在していて欲しい。親は子の命を守る義務があるのではないのか。
- 臓器移植の是非については、正直私はわからない。しかし、世の中には自分ですすんで臓器を提供してくれる人がいることを信じたい。そして、その臓器によって命をいただけた、そんなあたたかい世の中に生まれたということを、子どもに話してあげられたらと願う。

たとえば、**(A)への反論…**

◎　人工的に生きさせているだけだから、死んでいると見なすことが合理的判断だ。

←反論への反論…

心臓に人工弁を入れて生きている人も人工的ないのちということになる。その他、人工的な医療技術によりいのちをつないでいる人々は大勢いる。何よりも「いのち」そのものに価値があるのではないのか。また、1991 年山口大学病院にて脳死と判定された妊婦がその 19 日後に女児を出産したという「事実」をどのように説明するのか。まさか死者から生命が誕生したとは言えない。

たとえば、**(B)への反論…**

◎　ドナーカードの自己確認については、本人が脳死の判定がどのようになされているか、その実態を知ることもなく、軽々に臓器提供に同意している場合がある。使える臓器は、生きた臓器であり、生きた肉体から臓器を取り出すことは間接的な殺人ではないのか。

←反論への反論…

不慮の事故などに遭って意識がなくなったときには、命を使ってもらいたい、人の役に立ちたいという生前の「いのち」に対する思い、そんな人間生来の善意や博愛の精神を活かすことも、人間社会の大切なスタンダードなのではないか。

どうですか？二つの立場、キミは理解できたでしょうか？
では、どうすべきか？

それはキミが考える問題です。
上記ことがらは、まさしくキミの「思考の足あと」をつくるための練習、キミの思考材料です。
ここで少し大切なことを伝えますね。
小論文に関係する本などをぼんやり眺めていると、次の言葉がやたらと登場します。「客観・客観的・客観性・客観視…」あるいは「論理・論理的・論理性…」。ところが上記の臓器移植問題のように、ただ客観性を求めて型としての論理をつくろうとしても困難もしくは不可能なテーマが入試小論文では、当たり前のように登場します。
私たちが生きる社会というステージでは、論理で片付けられない、客観的に思考するなんて不可能なことは山のようにあります。その人の立場や当事者の感情で動かざるを得ないことなんていくらでもあるってことです。だいたい文系の論文などというものは、私は著者の主観のカタマリが露出したものではないかと思っています。そこには客観性なんて存在してません。それがあるのは、数字の世界、数学の世界だけのような気がします。数字は時代や場所を超越して普遍的なものであるからです。
よって、キミが小論文を書くときは、**キミの主観を、キミの悪戦苦闘した思考の足あとを、答案に示せばいい**のですよ！
上記ことがらは、さっき述べたとおり、まさしくキミの「思考の足あと」をつくるための練習に最適です。二つの異なる立場の主観を想像し、それぞれの立場から思考する、その繰り返しが、思考の足あととして残るのであり、それがキミの独自性を担保するのですよ。
だから、**(A)(B)どちらかの立場で強引に結論を出す必要はありません。**第３の道、二つの立場を満たす方策を考えてみてもいいかもしれません。キミは二つの立場を理解した上で論を組み立ててください。キミの思考の足あと、それを残せるように心がけ、その考えを

ノートにまとめておきましょう！いいかい？無理に結論は出さなくていいからね。

ノートとして…

「 日本人の遺体観について 」

設問条件「死の定義」「死の判定」

‖

〈考える前提〉 ‖

脳幹死？ 全脳死？ 心臓死？

⇩

死

‖

- 自分では体験できないもの。
- 一度しか経験できないもの。

⇩

よって、（ 死 ）を語るときはあくまでも（自分以外の他者）についてのもの。

「死とは何か？」 ＝ （他者の死）とは何か？ ということ。

※ あくまでも（他者の死）についての定義づけが前提。

⇩

※ 「他者の遺体」に対する私たちの考え方が反映される（国・民族・宗教・自然観）。

‖

- 映画『おくりびと』に見られる遺体観とは？

あるいは、

- 自分の考える日本人の遺体観とは？

＋

- 近代科学（医学）の発展→臓器移植

日本語総論Ⅱ　おたすけプリント　2

「日本人の遺体観について」

☆ **文章の組み立て方は？　→　バイブルP. 22～26を熟読のこと！**

基本形として…

資料（課題文）に示されている状況・状態・事態（＋筆者などの考え方）をまとめて簡潔に提示。	第1段落
第１段落に提示した内容についての私の考え方の方向性を提示。	第2段落
私の考えの提示（＋その理由＋具体例など）	第3段落
私の考えのまとめ	第4段落

★ **課題文の読み取りポイントは？　→　バイブルP. 20～21を熟読のこと！**

今回は課題文ではなく、**資料が提示**されています。よって、**どんな状況**が提示されているのか？それだけをチェックしよう！

日本語総論Ⅱ　おたすけプリント　3

◇◆◇ 解法へのアプローチ 練習問題2「日本人の遺体観について」 ◆◇◆

☆ 資料からピックアップしてみよう！

①設問条件の「死の定義」と「死の判定」について、どんな状況が示されているか？
次の括弧の中に「死の定義」・「死の判定」・「脳死」・「臓器移植」を入れてまとめてみよう。

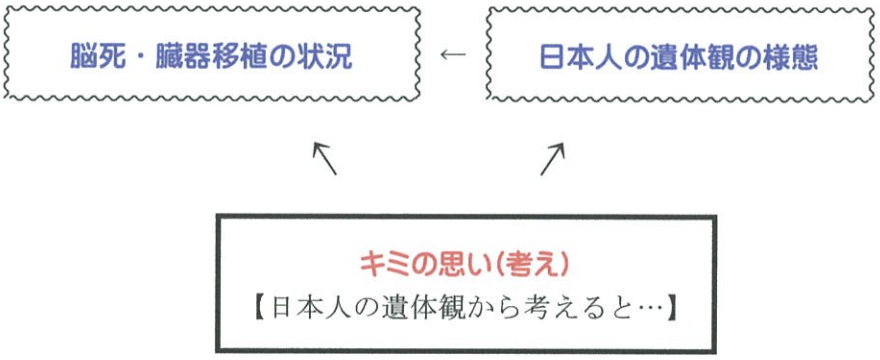
日本の脳死臨調の答申においては、(　　)は(　　)をもって人の死とする内容となっている。しかし、その答申においては、(　　)とともに、(　　)に伴う臓器提供者の(　　)という重大な問題が公的に対応する形で打ち出されている。今までの経緯・状況として、(　　)問題が生じた背景には、(　　)の問題がある。

★ 第1段落をまとめよう！（下書き）※今回は上の文章内容が第１段落になります。

③「脳死」「臓器移植」問題の状況・状態をキミはどう思う（考える）のか？メモ書きしてみよう！今までとこの後のおたすけプリント4を活用しよう！

④ ③と照らし合わせながら設問条件「日本人の遺体観」について、キミはどう思うか（考える）か？メモ書きしてみよう！

答案用紙に向かうその前に、文章の組み立て方について、構図を描いてみると、頭の中がスッキリとするはずです！



設問条件を取り込んだ構成・内容を考える

設問条件は、**日本人の遺体観についてあなたの考えを述べよ**、ということなので、キミは**「臓器移植」に賛成や反対の立場で書く必要はまったくありません。**次のようなフレームを予めつくっておけば、まとめやすいと思います。

思考のフレーム

日本人の遺体観は、映画「おくりびと」から**○○だと見て取れるように、△△といったものである。この「日本人の遺体観」から、**現在の臓器移植や脳死に関する問題点について、**私は□□ではないかと思う（考える）。**

※　○○や△△はひと言ではなく、その内容は長くなりますよ。□□については、さらに長くなって、キミの思考の足あと（ああでもないこうでもないと思いを巡らせたことを表す）ようにしましょう！

よって、第２段落と第３段落は、キミの意見中心になります。

★ **第2段落をまとめてみよう！**（下書き）

★ **第3段落に、自分の考えを述べよう！**（下書き）

※　第３段落を二段落に分けてもかまいません。

日本語総論Ⅱ　おたすけプリント　4

思考の材料　バイブルにメモしよう！

対人援助職に関わるテーマは、多岐にわたっています。なぜなら対人援助職は最終的には「いのち」そのものに関わってくる私たちの日常生活の根本をなすものだからです。
具体的には、医療系、社会・福祉系、教育系などが主なものです。ここでは、「いのち」の到達点というか、いのちのゴールといったらよいのか、なかなか形容しづらいのですが、「人の死」というものに焦点を当てます。「死」を考えることを通してその対極にある「いのち」についての思考をキミに深めてもらいたく、取り上げました。また、ここでの「死」は、「日本人にとっての死」を対象にして話を展開しています。

「いのち」のゴール → 「死」

「日本人にとっての死」やその捉え方を知る上で「日本人の遺体観」を考えておくことは、キミにとって今後、「キミの思考」を構築していく上でも大切なことではないかと思います。映画『おくりびと』には、日本人の死の捉え方、遺体観が表れています。

映画『おくりびと』に見られるテーマ①
「日本人の遺体観」←「日本人のとっての死」

「死」というものは、当たり前のことなのですが、一度しか経験できず、その経験を語ることはできないものです。ですから私たちが「死」にまつわる経験を語るときは、あくまでも自分以外の他者のものについてとなります。

「死」にまつわる経験 →「他者の死」にまつわる経験

映画「おくりびと」においても、納棺師が関わる「他者の死」、その家族や関係者が関わる「身近な人の死」というものが描かれていました。納棺師はその死体となった他者を、まるで生きているかのような、生前の姿に復元します。その姿をみて初めて遺族はお別れできる、そんな場面がいくつもありましたよね。

日本人にとって、目の前にある生きたように見える死体は、西洋的な魂が抜け出た、抜け殻のような死体ではなく、焼かれて骨になる前、完全な死の手前、生と死の中間にあるご遺体なのです。その姿に、近しい人々は亡くなった方の在りし日の様子やその言葉などを蘇らせます。人々にとってご遺体はまだ完全に死んではいません。焼かれて骨になるまでの、あくまでも死と生の中間にある存在なのです。

「日本人の遺体観」＝焼かれて骨になるまでまだ死んではいない。

納棺師が復元したご遺体の姿から、遺族や知人・友人は生前の記憶を蘇らせます。そして、骨になって初めてその死を受け止めます。その後、生前の記憶が遺族や知人友人の心の中で生き続けていくのだと思います。故人のまっとうした「いのち」、その姿は、その人を知る人々の中で「生きた記憶」として受け継がれていくのです。

「いのち」＝死んだあとも他者の記憶の中で生き続ける。

次は、映画「おくりびと」にみられる「日本人の遺体観」をもとに、「脳死」や「臓器移植」の問題を考えてみましょう。きっと、キミ自身の深い思考が導き出せるはずです。「臓器移植」について、賛成や反対というどちらかの立場に立つのではなく、いのち思考によって、なんとかその両者の間での対立や葛藤を調和させることはできないのでしょうか。

「臓器移植反対の立場」⇄「臓器移植賛成の立場」

↑

「日本人の遺体観」から調和へ

さらにもうひとつ、「おくりびと」には、ボランティア精神というテーマが潜んでいるように思います。そして、ボランティア精神とは、報酬の有無にかかわらない、それ以前の、人としての心のありようです。たとえ収入のある仕事であっても、他者や社会のために自己の欲求や権利を求めることなく尽くそうとする気持ち、といったものがボランティア精神です。人はこのような気持ちを前提にして働く場合があります。ここでは、そのような広い意味で、ボランティア精神という言葉を使っています。

映画『おくりびと』に見られるテーマ②
ボランティア精神

主人公は納棺師の手伝いをすることで、収入を得られ、生活も安定していきますが、それよりも何よりも、その仕事に向き合うことで「自分のいのち」が活かされていくことに気づきます。妻や友人などに非難されても、納棺師を辞めようとしないのは、けしてお金のためではありません。仕事の内容的に忌み嫌う人々もいるかもしれませんが、彼はその仕事をまっとうすることで、自分が活かされ、自分のいのちが輝いていくことを実感します。

「おくりびと」という仕事を行うことで活かされる自分

↑

「いのちの輝き」

主人公は、ご遺体と向き合うことで、その人の「まっとうしたいのち」を見つめ、その「いのち」が家族や知人へと繋がっていくことを実感します。遺体と向き合うことで、「自分の充実した生」を実感させてもらった、これはまさにボランティア精神です。

他者のために働くことで自分も活かされている。助けるつもりが助けられている自分を実感する、これは医療系、福祉系、教育系、社会学系の仕事において、その精神の大切な原点になるものだと思います。

自分の「いのち」が活かされていることの実感

‖

ボランティア精神の根本

ーおくりびとメモー

本木雅弘が 1996 年に青木新門・著『納棺夫日記』(文春文庫)を読んで感銘を受け、青木新門宅を自ら訪れ、映画化の許可を得た。その後、脚本を青木に見せると、舞台・ロケ地が富山ではなく、山形になっていたことや物語の結末の相違、また本人の宗教観などが反映されていないことなどから当初は映画化を拒否される。本木はその後、何度も青木宅を訪れたが、映画化は許されなかった。「やるなら、全く別の作品としてやってほしい」との青木の意向を受け、『おくりびと』というタイトルで、『納棺夫日記』とは全く別の作品として映画化。映画公開に先立って、小学館でさそうあきらにより漫画化されている。

小論文バイブル 第2回 思考おたすけプリント5

「脳死」についての思考を深める

ひとの死の概念がゆれている。心臓死から脳死へ。しかもその脳死も機能死か器質死か、そして全脳死か脳幹死かなどの問題が医学者たち専門家のあいだでも未決だし、まして私たち大衆は伝統的な死概念を簡単には棄てきれない心情にある。脳波がもうないといわれても、あたたかい血が脈打っているひとをあっさり死人だとは思いきれない。

ところで、脳の機能死を人間の死とみなそうとする専門家には臓器移植への関心がある。かれらにいわせれば、臓器移植をすれば助かるひとを臓器移植で助けるのはおおいなるヒューマニズムであり、脳死を認めず臓器の提供も認めずに助かるひとをも助けないのはヒューマニズムのかけらもない、医道にももとる冷酷なことなのだ。しかし、心といえば胸に手をあて、けっして頭にあてることをしないわたしたちは、まだ動いている心臓をとりだすことはもとより他の臓器さえとりだすことをヒューマニズムだとはなかなか思えない —— 本人が臓器提供の遺言をしていれば話は別であるけれども。臓器移植という医療技術の開発は、こうしてヒューマニズムという根本的概念さえもかく乱しているわけだ。

かりに臓器移植がヒューマニスティックな行為だと文化的に認められ、移植技術も発達し、臓器移植がどんどんおこなわれるようになると想定してみよう。そのとき、たとえば次のようなグロテスクなことは起こらないだろうか。脳死したひとの首から下をそっくり、脳はふつうに生きているが首から下の体に手のほどこしようもない疾患があるひとに移植するのである。つまり、二人のひとから一人のひとを首を接合点にして合成することだ。あるいは、生きている脳だけを移植することができるかもしれない。この合成人間はいったい誰だろう。法的にはたぶん、生きた脳を中心に考え、これをレシピエント（受け手）とみなし、このひとの名が続けて使われるだろう。つまり、レシピエントが生きつづけ、ドナー（与え手）は死亡したことになる。けれども、レシピエントは首から上ないし脳だけが働きつづけ、ドナーはそのほとんどの身体が機能しつづける。このときはたして、外見がまったく他人になったレシピエントを従来どおりのひとと同一視できるだろうか。とくに肉親や親友や恋人は同一視できるだろうか。従来どおりの人間関係を続けることができるであろうか。あるいは、脳と名前が変わっても外見はほとんど変わらないひとをドナーに近かったものはアカの他人だとすっきり思えるだろうか。単純な答えは出そうにない。

このように、人間を合成するような臓器移植技術は「なさけが仇」なんて軽く笑ってはいられないほど深刻なパラドックスをもたらすしかないように思えるのである。

「現代社会のパラドックス」より。

日本語総論Ⅱ　おたすけ復習プリント

◇◆◇ 解法へのアプローチ 練習問題2「日本人の遺体観について」 ◆◇◆

☆ **資料からピックアップしてみよう！**

設問条件の「死の定義」と「死の判定」について、どんな状況が示されているか？
括弧の中に「死の定義」・「死の判定」・「脳死」・「臓器移植」を入れてまとめてみました。

日本の脳死臨調の答申においては、**「死の定義」**は**「脳死」**をもって人の死とする内容となっている。しかし、その答申においては、**死の定義**とともに、**臓器移植**に伴う臓器提供者の**「死の判定」**という重大な問題が公的に対応する形で打ち出されている。今までの経緯・状況として、 **脳死**問題が生じた背景には、**臓器移植**の問題がある。

★ **第1段落をまとめよう！**（下書き）※今回は上の文章内容が第１段落になります。

日本の脳死臨調の答申においては、「死の定義」は「脳死」をもって人の死とする内容となっている。しかし、その答申においては、死の定義とともに、臓器移植に伴う臓器提供者の「死の判定」という重大な問題が公的に対応する形で打ち出されている。今までの経緯・状況として、 脳死問題が生じた背景には、臓器移植の問題がある。そのことを資料から読み取ることができる。

「脳死」「臓器移植」問題の状況・状態をキミはどう思う（考える）のか？メモ書きしてみよう！今までとこの後のおたすけプリント4を活用しよう！

医師が脳死であると判定したならば必ず人の死であるとする法的な決定は、脳死判定された本人と回復を祈る家族の切実な思いを否定することになる。一方、たとえ脳死であると医師が決定したとしても、本人の意思にかかわらず絶対に人の死ではないとする法的な決定は、博愛の精神と臓器移植を心から願う患者やその家族の切実な思いを否定する。はたして両者の切実な思いに応えられる方策はあるのだろうか。

※　**おたすけプリント1**の２ページから取りあげられている**(A)**と**(B)**の両方の立場をまとめて提示してみた。

前項と照らし合わせながら設問条件「日本人の遺体観」について、キミはどう思う（考える）か？メモ書きしてみよう！

日本には納棺師という職業がある。その納棺師が登場する「おくりびと」という映画から、日本人の遺体観を考えてみた。たとえ医学的・法的に死んだ人であっても、納棺師によってまるで生きているかのように復元される遺体。私たちはその人の最後の姿であるご遺体に向き合ってお別れをした後に、その人の死を徐々に受け入れていく。つまり、日本人にとって、焼かれて骨になるまでその人はまだ死んではいない。

そして、日本人は古来より「あの世」を信じてきた。年老いて隠居するのは、あの世で生まれ変わるための準備期間なのだという考えである。自分が死んでも、自分の魂は子孫に受け継がれていくのだという日本人の遺体観こそ、生命のもつ威厳を保つことにつながると思う。一方、臓器移植を願う患者や家族の思い、そしてそれを受け入れる博愛精神をもった人の存在も無視できない。

この二つの思いを受け入れるには、法的に「二つの死」を認めるしかない。医学的に脳死と判定されたとしても、家族の思いや日本人の遺体観を優先させて、「その人は死んではいない」と判断し臓器移植は不可とするケースを認める。それが一つの脳死対策だ。一方、心身ともに健康な時に、本人の臓器提供をする意思が具体的に記されたものが存在し、その家族が本人の博愛の精神を尊重し、その意思表明に同意する場合に限って、脳死は死であると認め、 臓器移植を認める。これも脳死対策の一つとする。

なかなか困難を極めることだと思うが、脳死という現象に対して異なる二つの価値観をもつ人たちが存在するのは確かであるし、その二つの死、二つの価値観を調和させることは可能であると思う。そのような社会を、私は理想としたい。

例

日本の脳死臨調の答申においては、「死の定義」は「脳死」をもって人の死とする内容となっている。しかし、その答申においては、死の定義とともに、臓器移植に伴う臓器提供者の「死の判定」という重大な問題が公的に対応する形で打ち出されている。今までの経緯・状況として、脳死問題が生じた背景には臓器移植の問題がある。

脳死判定はすなわち人の死であるとする法的な決定は、判定された本人と回復を祈る家族の切実な思いを否定する。一方、脳死と判定されても、それは人の死ではないとする法的な決定は、博愛の精神と臓器移植を心から願う患者や家族の切実な思いを否定する。どうすればいいのか。

私は「おくりびと」という映画から、日本人の遺体観を考えてみた。たとえ医学的・法的に死んだ人であっても、そのご遺体は納棺師によってまるで生きているかのように復元され、私たちはその最期の姿に向き合う。そして、焼かれて骨になって初めてその人の死を受け入れる。この遺体観からすれば、脳死は人の死であるとは受け入れがたい。しかし、臓器移植を願う人の思いやそれを受け入れる博愛精神をもった人の存在も無視できない。この二つの思いを受け入れるには、法的に「二つの死」を認めるしかない。医学的に脳死と判定されたとしても、家族の思いや日本人の遺体観を優先させて、「死んではいない」と判断し、臓器移植不可とするケースを認める。また、本人のその意思を具体的に記したものが存在し、家族が本人の博愛の精神を尊重し、その意思表明に同意する場合に限って、脳死は人の死であると認め、臓器移植を認める。なかなか困難を極めることだと思うが、脳死という現象に対して二つの異なる価値観をもつ人たちが存在するのは確かであるし、その二つの死、二つの価値観を調和させるには日本人の遺体観に配慮した、二つの死の法的な整備が必要だと思う。(776字)

＊ 「脳死」の是非に論点を置き、その上で、自分なりの「日本人の遺体観」を述べればよい。

＊ 例は、「脳死」を異なる「二つの死」としてとらえ、その説明に「日本人の遺体観」を取り込んだ。

＊ 「二つの立場(二つの死)」という問題点を提出して論点を絞ると、たとえ結論を出さなくても論述にまとまりができる。参考にしてもらいたい。